



TITLE:

英国でコンタクト・ゾーンを考える : グラストンベリーにおける女神運動とドルイド教を事例として

AUTHOR(S):

河西, 瑛里子

CITATION:

河西, 瑛里子. 英国でコンタクト・ゾーンを考える : グラストンベリーにおける女神運動とドルイド教を事例として. コンタクト・ゾーン 2008, 2: 131-147

ISSUE DATE:

2008-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/177208>

RIGHT:

英国でコンタクト・ゾーンを考える

——グラストンベリーにおける女神運動とドルイド教を事例として

河西瑛里子

1 はじめに

「これまでは私たちヨーロッパ人が他の地域の人々のことを調査していたけれど、これからは私たちだって調査されるべきよね。そうでないと不公平なもの。」

イギリスでの調査も半ばを過ぎたある日、イギリス人の友達と散歩をしていた。彼女は、筆者が文化人類学を専攻していて、その中でもイギリス人を調査対象にしていることを知ると、にっこりと微笑んで、こんな返事を返してくれた。このときは単に励ましの言葉と受け取ったのだが、あとになって考え直してみると、もっと深い意味を含んでいるように思えてくる。

彼女の言うとおり、初期の文化人類学では、ヨーロッパの人々は非ヨーロッパ人を調査する側であり、ヨーロッパ人以外の人々による調査の対象となることは少なかった。ほとんどなかったといってもよからう。プラット [Pratt 1992] の提示する「コンタクト・ゾーン」とは「植民地支配の辺境」であり、そこで、想定されている相互交渉の関係は、ヨーロッパ人（とりわけ都市に住むマジョリティ）と「現地人」の関係である。「現地人」とは、ヨーロッパ人が出かけていった先の「現地」で出会った人々のことである。つまり、「植民者」の出身地域のヨーロッパが「現地」になることは、ヨーロッパに暮らす移民などのマイノリティの調査を除くと、ほとんどなかったといってもよい。すなわち、ヨーロッパ人にとっての「現地人」が、ヨーロッパという空間に出かけて行って、ヨーロッパ人に出会うことは想定されていなかったのである。

確かに50年前なら、ヨーロッパは「現地人」にとって遠い空間だったかもしれない。しかし、現在では、一部の「現地人」にとっては、ヨーロッパは気軽に出かけられる空間であり、実際、多くの非ヨーロッパ人がヨーロッパを訪れ、ヨーロッパという「現地」で、「現地人」としてのヨーロッパ人に出会っている。このような状況を踏まえたうえで、本稿では、ヨーロッパという「現地」で、マジョリティとして暮らすヨーロッパ人を「現地人」とみなして調査することを通して、ヨーロッパにおけるコンタクト・ゾーンについて考えることを目的とする。従来、調査される側であった非ヨーロッパ人の筆者が、調査する側であった欧米人を観察することは、これまでのコンタクト・ゾーンの議論の中では想

定されていなかった実践であるため、調査者と非調査者の関係は、より複雑で重層的なものになっている。それを踏まえて、筆者の実践そのものが文化人類学の現代的実践であることを明らかにしたい。

本稿で取り上げるのはグラストンベリー（Glastonbury）というイングランド南西部の町である。この町は、伝説のうえに成り立っている聖地であるため、過去と現在が交錯し合う場所であり、また世界各地のネイティブ文化に魅せられた欧米人が集うことから、さまざまな文化も交錯し合う場所である。つまり、この場所自体がコンタクト・ゾーンを生み出す可能性を秘めた、創造的な実践の場所なのである。このことを背景に、時間的かつ空間的に、グラストンベリーのコンタクト・ゾーン性を探っていく。

具体的には、調査地であるグラストンベリーの概要を述べたあとに、当地で盛んな女神運動（Goddess Movement）とドルイド教（Druidry）という二つの宗教的運動に注目し、筆者が深く関わった二つの儀式を事例として取り上げる。その場での、各参加者と筆者との関係をより明らかに示すため、事例は一人称で記述している。

本研究は2005年10月～12月、2006年4月～9月、2008年7月～8月の合計9ヶ月半にわたる英国でのフィールドワークにもとづいている。調査方法は、参与観察とインタビューを併用した。また、女神神殿（Goddess Temple）や女神カンファレンス（Goddess Conference）ではボランティア・スタッフとして働きながら、調査をおこなった。本稿に出てくる個人名は、原則として全て仮名である。

2 調査地グラストンベリー

2-1 グラストンベリーの歴史と今

グラストンベリーはイングランド南西部サマーセット州の中心部に位置している。人口は約9000人の町である [Census 2001]。イングランド南西部最大の港町ブリストルや世界遺産指定都市バースからは、それぞれ車で約1時間の距離にあり、ロンドンやバーミンガムからも車で4、5時間の距離であり、交通の便は悪くはない。非白人率は1.5%で [Census 2001]、町の中で白人以外の人種を見かけることは少ない。

グラストンベリーという町の名の語源には諸説あるが、その有力な説の一つに、イニスウィトリン（Ynisvitrin）がある。これは、ケルト語でガラスの島（Glassy Isle）とか輝く島（Shining Isle）という意味である。かつてグラストンベリー一帯は湿地帯で、冬にはトール（Tor）と呼ばれる小高い丘を残して、一面に水が浸み出し、湖のようになっていた。その水が、太陽の光を受けてきらきらと輝いていたため、このような名前がつけられたようである。輝く湖の中に島のようにそびえたつトールは、神秘的な印象を人々に与え続けてきた。

この土地には、紀元前4～3世紀は、ケルト系の民族が住んでいたが、紀元後1世紀前半には、外敵の侵入をうけ、滅亡したらしい。その後、ローマ帝国の属州の一部となったが、ローマ軍の撤退後はケルト系ブリトン人諸部族の部族王国が乱立する。しかし、7世紀末にはブリテン島の大半が大陸からやってきたアングロ＝サクソン人の支配下に入っ

た。

アングロ＝サクソン人がグラストンベリーにやってきた頃にはすでに、アイルランドやウェールズ由来のケルト的キリスト教の教会があったらしい。7世紀末にローマからカトリックがもち込まれてからも、グラストンベリーはウェールズに暮らすケルト人との接触を保ち続けた。そのため、この頃以来、グラストンベリーは、ケルト文化とカトリック文化という異なる文化の接触地点であり続けてきた。

中世、グラストンベリー修道院はイングランドで最も繁栄した修道院の一つであり、町もカトリックの巡礼地として栄えていた。しかし、1539年、ヘンリー8世により修道院解散令が發布され、グラストンベリー修道院も閉鎖されると、町は急速に衰退していく。ところが、18世紀にイングランドでケルト文化の再評価が起こると、グラストンベリーはキリスト教の聖地としてだけでなく、ケルト文化の聖地として、一部の人々の関心を引いた。しかし、表面的にはまだ農業を中心とする一般的な町だった。

この町が大きな転換を迎えたのは、1970年前後のことである。当時、英国の産業構造の変化による農業の衰退と、隣町にあった靴工場の海外移転に伴い、失業問題が深刻化していた。そんな中、この町のもつ歴史や伝説に魅せられた、多数のヒッピーやニューエイジャーがこの地を訪れるようになっていた。1970年に始まったグラストンベリー・フェスティヴァルの影響も大きかった¹⁾。1980年代に入ってから移住者も出てきた。現在、グラストンベリーには「その他の信条 (Other Faith)²⁾」を信じる人の割合が、イングランドとウェールズの中で最も高い。新住人の多くが、空き店舗が目立ち始めた町の中心部にスピリチュアリティ関係の商品や書籍を扱う店を開き、ヒーリングや宿泊施設を始め、スピリチュアリティに関するイベントを企画していったことにより、町は活気を取り戻し始めた。

ふつうの町を望む旧住人と、「変わっている」新住人との間に軋轢が生じていたが、1990年代から住人同士の関係は好転し始める。プリンスとリッチーズはその理由として、新住人が開いた店のおかげで町の経済が活性化された、新住人の子供が地元の学校に通い始めるようになった、新住人が地元民との溝を埋める努力をしていた、を挙げている [Prince & Riches 2000: 82-84]。その結果、スピリチュアリティに関心のある人々がより多く町に集まるようになり、町はますます「変わった」町としての様相を呈していった。行政機関も、訪問者が町に与える経済効果を見逃すことができなくなってきて、最近では彼らを積極的に誘致しないまでも、訪問を歓迎するようになってきている。

2-2 伝説の中のグラストンベリー

グラストンベリーという町は、古くからスピリチュアリティの中心地として知られてきた。時代によってその根拠は異なるが、現在、当地を聖地とみなす背景には、大きく分けて三つの視点がある。

まず、この土地が本質的に特別であるという視点がある。グラストンベリーはエネルギー・スポットだと言われる。たとえばグレート・ブリテン島にいくつも存在すると言われる、レイライン (Ley Line)³⁾ の交差点がグラストンベリーにあるとされている。つまりレイラインの中でも最も強力な聖マイケルラインが、聖メアリーラインとグラストンベ

リーで交差しているため、地球のエネルギーがとても強いと考えられている。また、郊外の丘グラストンベリー・トール (Glastonbury Tor) は、天からのエネルギーを受け取り地面に流しているとか、大地からのエネルギーを吸い上げて世界中に流していると言われる (写真1)。このような理由で、スピリチュアルなエネルギーが強いため、スピリチュアルな人々がこの土地にひきつけられるというわけである。当地で UFO の目撃情報が多いのも、このエネルギーが関係していると考えられている。

続いて、特別な人物がやってきたから、この土地は特別になったという説がある。イエス・キリストの大叔父、アリマテアのヨセフ (Joseph of Arimathea) が、イングランドに初めてキリスト教を伝えたという伝説から、この町はイングランドのキリスト教発祥の地とされる。彼は最後の晩餐で使われた聖杯と、キリストの血液と体液を入れた小瓶を携



写真1 グラストンベリーの象徴であるトール

えて、1世紀に当地を訪れたと言われる。また、最後の戦いで敗れ、傷を負ったアーサー王が運ばれたアヴァロン島 (Isle of Avalon⁴⁾) はグラストンベリーであるというのが、英国では定説になっている。というのも、12世紀、グラストンベリー修道院から、アーサー王夫妻のものとされる棺と遺体が見つかったからである。ここでは伝説をもとに、グラストンベリーを特別な場所とみなす視点が伺える。

第三に、一般の人々が集まることで、スピリチュアルなエネルギーが生み出されたという意見もある。

いずれにしてもグラストンベリーが特別視される根拠は伝説であり、そのような伝説は現在でも創り出されている。グラストンベリーという空間の聖性、特殊性は目に見える証拠となる考古学的な遺跡や歴史的建造物より、人々の主観的な想像力にもとづいているのである。

3 グラストンベリー女神運動

ここでは、グラストンベリーで始まった女神運動 (以下、グラストンベリー女神運動) を取り上げる。初めに、欧米の女神運動について説明し、グラストンベリー女神運動の概略を述べる。そのあとに、2006年の秋分の儀式を事例として取り上げる。

3-1 欧米の女神運動とグラストンベリー女神運動

欧米における現代の女神運動、または女神崇拝 (Goddess Worship) とは、1970年代に北米やヨーロッパにおいて、フェミニズムやネオペイガニズム (Neopaganism⁵⁾) から生まれたスピリチュアリティ運動の一種である。その背景には、「父なる神」を中心とする男性中心主義的なユダヤ・キリスト教に対する、女性たちの反発があった [小松 2007]。キリスト教では、神もイエス・キリストも男性のイメージで語られるため、女性の神的存

在を認めることは、とりわけ女性にとって、新鮮なものだった。このような女神運動は、北米やヨーロッパの英語文化圏およびプロテスタント文化圏を中心に広がりを見せている。

グラストンベリー女神運動も、このような女神運動の流れを受けている。その中心的人物であるキャシー・ジョーンズ (Kathy Jones) は、1980年代には、「女神の展覧会」や「女神の日」というイベントを催していた。1990年には、初めての女神に関する著書、『古代ブリテンの女神 (*The Ancient British Goddess*)』を出版している。1990年以前のグラストンベリーに関する研究 [Fortune 2001 (1986); Hexham 1971; Roberts 1978] では女神運動についての記述がないこと、2000年代からはグラストンベリー女神運動を扱った論文 [小松 2007; Bowman 1993, 2004, 2005; Prince & Riches 2000; Sage 2005/2006] がいくつか発表されていることから、現在のように公共に開かれたグラストンベリー女神運動は、『古代ブリテンの女神』の出版が契機になったと考えられる。

グラストンベリー女神運動の活動は、大きく分けると、年1回の女神カンファレンス、女神神殿 (Goddess Temple)⁶⁾、季節の儀式とヒーリングの三つがある。

1996年に始まった女神カンファレンスは、毎年8月の初めに開催される5日間のイベントである。これは学術的な会議ではなく、女神に関心のある人を対象にした、女神に関するお祭りである。女神に関する講演やワークショップの他に、町の中心部から郊外のツールまでの行進や仮装パーティなどがおこなわれる。グラストンベリーの夏の「変わった」風物詩として知られている。

2002年には、女神神殿 (Goddess Temple) という恒久的に女神を祀る場所が、町の中心部の一部屋を借りて、つくられた。30畳ほどの部屋だが、政府から正式な宗教施設として認可されている。ほぼ毎日、ボランティアにより開館していて、開館中なら誰でも訪れることができる。女神神殿では、たびたびイベントが開催されている。主なイベントには、年8回⁷⁾の季節のお祝いと新月のヒーリングなどがある。グラストンベリー女神運動の関係者以外の参加者も歓迎されている。

この女神運動は英国国内のみならず、ヨーロッパ大陸や北米の人々からも幅広く支持されている。参加するための条件は特になく、関心があれば、誰でも参加できる。参加者の女神への関心の度合いはさまざまで、楽しみのために参加している者もいれば、日常的に女神崇拝を実践している者もいる。熱心な信仰者は司祭 (priestess, priest) と呼ばれる。

キャシーは独自の視点から、女神についての講座も開いており、その受講者が、出身地域で活動することにより、グラストンベリー女神運動は英国のみならず、ヨーロッパ各地や南北米、太平洋地域にまで広がっている。

キャシーは、グラストンベリーをアヴァロン島とみなす伝説だけでなく、アヴァロン島は女性が統治する女神の島だという伝説も取り入れて、グラストンベリーと女神を関連づけている [Jones 2000]。さらにグラストンベリーの地形は女神の姿を現しているとも言う [Jones 2001: 125-126]。グラストンベリーという土地自体、女神の聖地とみなされているのである。他の多くの女神運動では、ギリシャ、ローマ、エジプト、トルコといった地中海沿岸の女神を崇拝することが多い中、グラストンベリー女神運動では、それらに加えて、ケルト文化の女神やブリテン島固有の女神を重視している点が特徴的である。

3-2 秋の盛りを祝う

ここでは、2006年9月22日におこなわれた秋分の儀式を取り上げる。この儀式は、筆者



写真2 女神神殿に飾られていたバンバの絵と祭壇

がグラストンベリーを去る1週間ほど前に開かれたもので、筆者にとっては最後の女神関連の儀式となった。先述したように、グラストンベリー女神運動では、年8回の季節の祭りを祝っているが、その中で秋分は秋の豊かな収穫を祝う日として位置づけられている。秋分を司る女神は、ケルト名でバンバ (Banbha) と呼ばれる穀物の女神である (写真2)。方角としては西、大地 (Earth) を司る。グラストンベリー周辺に暮らす女神運動の司祭たちが主催していて、午前7時半頃から始まる。これまでは、季節の祭りは女神神殿で開かれてきたのだが、最近では参加人数が増えたため、この儀式から町の集会所⁸⁾を借り切って、開かれるようになった。この日の参加者は100人ぐらいで、そのうちの約4割が男性だった。

参加者の中には、女神運動の常連者だけでなく、女神運動とは直接的な関わりをもたないグラストンベリー住人もいた。10代の女の子2人組もいた。

室内には、9体のモーガン人形が女神神殿から運ばれてきていた。モーガンとは、グラストンベリーの別名でもある伝説の島アヴァロンを治めるという9人姉妹神である。モーガン人形とは、籐でできた等身大の人形で、それぞれのモーガンの特性に合わせて、リボンや小物で装飾されている。8体は8方角の部屋の壁際に置かれていたが、秋分の女神バンバを示す、オレンジと茶色のリボンで飾られたモーガンだけは、部屋の中心にあった。アヴァロンの女神 (Lady of Avalon)、またの名をモーガン・ラ・フェイ (Morgan la Fay) を表す籐人形が、赤いリボンとバラの造花で飾られて、正面のステージに据えられていた。その周りには、秋の豊作の象徴として、プラム、ブラックベリー、ラズベリー、ヘーゼルナッツ、どんぐりなどが捧げられていた (写真3)。



写真3 秋の実りを捧げられたモーガン

儀式が始まる前、司祭バー吉ニアに会ったので、「来週、グラストンベリーを発つから、(ボランティアをしていた) 女神神殿の鍵を返すね」と言って、鍵を返す。続けて、「でも、メリッサ (=女神神殿のボランティアの呼び名) のメーリングリストから外さないでね」とお願いをする。すると彼女は、「わかった、もちろんよ。そうすれば、日本に帰ってしまっても、つながりを保ってられるものね」と了解してくれた。

そのうちに、中央のモーガンの周りに8人の司祭が集まってきた。いつものように、サークルを開くところから始まる。呼び出し役の8人の司祭が、秋分の女神バンバを表す

モーガン人形の周りにサークルを作り、その周りを参加者全員が取り囲む。そうして、サークルの中に9人の女神を順に呼び出していくのだ。呼び出しは西のバンバから時計回りに始まる。バンバを呼び出したのは、先述したバージニアだった。

「皆さん、私と一緒に西を向いてください」。バージニアが両手を挙げて、力強く告げると、参加者も両手のひらを軽く上向きに挙げて、時計回りになるりと回って西の方角を向く。勧請の言葉（附録参照）を唱え始める。

万歳、そしてようこそ、バンバ。

すばらしい大地の母、ガイア。

私たちは、あなたを呼び出します。ようこそ。ここに来て、あなたの聖なる空間の中で私たちに加わってください。

私たちは、あなたの聖なる体の上を歩き、足元の冷たさであなたを感じます、夏が終わろうとしています。

あなたのフルーツ、ベリー、ナッツの豊富さに感謝を捧げます。収穫の二度目の分け前です。

あなたは私たちを食べさせ、育んでくれます、私たちを世話してくれます、私たちをあなたの美しい体の上に根付かせてくれます。

大地はいまや茶色くなっています。金色や琥珀色の樹々や舞い落ちていく落ち葉。

あなたは眠りにつく準備をしています。

すばらしいレディ、深い所に住むあなたの創造物を呼び出します。穴熊よ、狐よ、土竜よ。私たちに加わるために、地中深くの巣穴や家から出てきてください。

モーガン、彼女らの土地アヴァロンのシスター、モロノウエイ、大地と魔術の神秘の番人。

あなたが私たちを世話してくれるようにあなたを世話するために、私たちに母を教えてください。

西のノラヴァよ、来てください。来て、私たちに加わってください。呼吸することであなたを感じ、取り入れます（ここで参加者も大きく息を吸い込む）。今、ここに私たちと一緒にいてください。

万歳、そしてようこそ、バンバ。

全員で復唱する。「万歳、そしてようこそバンバ」「彼女を連れて、中央に向き直ってください」とバージニアが言い、参加者は時計回りに中央に向き直る。

続いて、北西のケリドゥイン（Keridwen）、北のダヌ（Danu）、北東のブリジット（Brigit）、東のアーサ（Artha）、南東のリアノン（Rhiannon）、南のドムヌ（Domnu）、南西のカー（Ker）をそれぞれの司祭が同じように勧請する。参加者はそのたびにそちらの方角を向き、司祭と一緒に女神を歓迎する。最後は、アヴァロンの女神が、バージニアによって呼び出される。

9人の女神全てをサークルの中に呼び終えたら、バージニアから秋分がどのような時期

かという説明がある。「今宵は秋分。秋分というのは、秋の収穫が真っ盛りの時期で、昼と夜の長さが等しくなる日です。この日から、だんだんと昼の長さが短くなっていき、冬に入っていくのです」というような話が続く。参加者は静まり返って、バージニアの話に耳を傾ける。

そのあと、一人の女性が太鼓をもって、中央に登場する。「ドラムの音に合わせて、4つのエレメントを、自由に体で表現して踊りましょう。今日は場所があるので、思いっきり、体を動かしましょう」と言われ、身体でエレメントを表現することになる。「空気 (air)」のときは、強い風が吹くように、手足を動かし、風のようにうなる。「水 (water)」のときは、川の水が流れるように体全体を滑らかに動かす。「火 (fire)」のときは、体を激しく動かし、叫び声をあげる。「大地 (earth)」のときは、床を力強く踏み鳴らす。初めのうちは、皆が同じような踊りをして、同じ方向に会場を回っていたのだが、次第にその場で、それぞれのやり方でエレメントを表現するようになっていった。踊りが終わると、この祭りの主たるエレメントである大地に敬意を表すために、その場でひざまずいて、床に頭をつけるぐらい深々とお辞儀をした。

それからステージに座った女性が、ギターの弾き語りを始める。ある女司祭は詩を読み、自作の歌を歌う男性もいる。そのあとに、司祭たちがステージの上にあがり、モーガンに捧げられていた果物を参加者に配ってくれた。ブラックベリー、ラズベリー、プラムと室内に甘酸っぱい香りが広がる。食べ終わった頃、歌い手の司祭のアニーがドラムをたたきながら歌い始める。思わず体を動かしたくなるような、明るく陽気な歌である。何も言わなくても、立ち上がり、音楽に合わせて、みんなで手をつないで輪になって踊る。

踊り疲れた頃、アニーを中心とした女神女声合唱団、ヴォーカル・アナ (Vocal Ana) が登場。彼女たちが、バンバの歌を披露する (附録参照)。

バンバ、9月のバンバ、柔らかな日差しと秋の雨
熟した果実、でも私たちは今年の喜びと痛みを忘れない
あなたは収穫の女神、大地の母、満ち溢れているもの
あなたはあらゆる果物をくれたから、私たちはみんなに感謝を捧げます

大地の母、ガイア、バンバ、モロノウエイ
大地の母、私たちにあなたの道を示してください
大地の母、一万の名前の母よ
大地の母、私たちの変化を手伝ってください

果実穀物、ナッツ、木の葉を、集めて、隠して、蓄えておきます
あなたの火を燃やし、私たちの家族を乾かし、暖かくしておくための木々
大地の奥深くは変わります、狐や穴熊が穴を掘ります
冬のための十分な貯蔵所と、やってくる寒さに備えた住みかとして

大地の母，ガイア，バンバ，モロノウエイ
大地の母，私たちにあなたの道を示してください
大地の母，一万の名前の母よ
大地の母，私たちの変化を手伝ってください

あなたの大地の上に立ちます，素晴らしい母よ，私の魂の中の静けさ
大地の平和のために祈ります，素晴らしい母バンバよ，私たちみんなを癒してください
あなたは与えてくれる者であり，保護してくれる者です，狐や穴熊を傍らにおいて
あなたを通して，私たちの夢が顕れ，深いところから地上へと持ち出されます

大地の母，ガイア，バンバ，モロノウエイ
大地の母，私たちにあなたの道を示してください
大地の母，一万の名前の母よ
大地の母，私たちの変化を手伝ってください

合唱団が退場すると，輪の中心に出てきたバージニアが，女神神殿でのボランティアの募集を告げる。そのあとに，「もうすぐ一人のメリッサが家に帰ることになりました」と言いながら，参加者の中にいた筆者を手招きした。突然のことに驚き，慌てて手にしていたメモ帳をポシュットにしまって，中央に出ていく。会場みんなの視線が自分に集まるのを感じる。バージニアは「この小さなエリコは神殿のためにとても素敵なエネルギーを注いでくれました。私たちはそれをとても嬉しく思います」と言うと，筆者をハグしてくれた。会場みんなが笑顔で拍手をしてくれる。「いつ帰るの？」という声が上がり，「来週の土曜日」と答える。キャシーも私をハグしてくれた。何か一言お礼を言いたい，という思いがこみ上げてくる。でも，とっさに言葉が出てこない。「ありがとう！」とだけ，言って，みんなの中に戻っていった。

キャシーが「みんなで祈りを捧げてそのエネルギーを外部に送ろう。特に中東へ」と提案する。この頃，イスラエル軍がレバノンに侵攻し，そのことが連日のようにニュースになっていた。そのため，そのような地域にポジティブなエネルギーを送ることで，そこが平和になることを願おうというのである。そこで，全員で中心を向いてしばらく祈ったあと，一斉に外側に両手を開き，中東に向けてエネルギーを放った。そのあとにスウェーデン人女性が，スウェーデンの歌を一曲歌った。

最後には，サークルを閉じる。初めと同じように，西のバンバから，時計回りに始まる。「皆さん，私と一緒に西を向いてください」。バージニアが両手を挙げて，力強く告げると，参加者も両手のひらを軽く上向きに挙げて，時計回りになるりと回って，西の方角を向く。バージニアは，「バンバ，ガイア，大地の女神，穀物の女神，モーガン・モロノウエイ…」と初めと同様にバンバを称える言葉，秋の恵みに感謝する言葉，今夜の儀式の成功を感謝する言葉を唱えていく。「ありがとう，そしてあなたの神殿からさようなら，バンバ」と

いう最後の言葉に続いて、参加者も「ありがとう、そしてさようなら、バンバ」と復唱し、時計回りに中央に向き直る。これでバンバはアヴァロンに帰ってしまった。続けて、初めと同じ順番で女神たちにお礼を言って、帰ってもらう。

女神が帰れば、儀式も終わり、解散となる。すでに8時半を回っていた。司祭の数人が、「女神神殿は皆さんからの寄付だけで成り立っています」と言って、帰り支度を始めた人々に寄付金を求める。人々は財布を取り出して、小銭をぽんと入れる。気前よくお礼を入れる人もいる。

終わったあと、ある人から、「バージニアがみんなの前でエリコを紹介してくれたのは、それだけみんながエリコ存在を嬉しく思っていたからだよ」と言われて、とても嬉しかった。キャシーやバージニアにも先ほどのお礼ともう一度お別れを言うことができた。

その夜のフィールドノートには、「生きてるって楽しいね☆」という感想が書いてある。

4 ドルイド教

つぎに、ネオペイガン的一种であるドルイド(Druid)について、グラストンベリーにおける活動を中心に紹介する。初めに、ドルイドと呼ばれる人々について説明する。そのあとに、グラストンベリーのドルイド団体の再編成の儀式と、それに付随しておこなわれた筆者のドルイドになるための儀式の様子を事例として取り上げる。

4-1 ドルイドとは

ドルイドとは、ブリテン島の先住民であるケルト人の信仰における神官を指す言葉であり、彼らの信仰はドルイド教と呼ばれる。18世紀にケルト文化が再評価されるようになって以来、ドルイドへの関心も高まりつつある。

ドルイドには宗教的ドルイドと文化的ドルイドがある。ケルト文化の継承者を自認している点は共通しているが、宗教的な信仰とみなしているかどうかは異なっている。宗教的ドルイドは、信仰としてドルイド教を実践していて、ネオペイガン(Neopagan)に含まれる。彼らは、ブリテン島各地で活動していて、儀式を重視している。それに対して、文化的ドルイドは、ケルト文化、とりわけウェールズ文化の継承者のことを指す。主な活動の場はウェールズであり、文学、歌、詩の創作と継承などに関わっている。文化的ドルイドにはキリスト教の信者も多い。

本稿中の「ドルイド」とは、特に断りが無い限り、宗教的ドルイドのほうである。彼らは、ケルト文化の継承者を自認している。自然とのつながりを重視し、戸外で日中に儀式をおこなうのが特徴であるため、都会より田舎で暮らす人が多い。女性より男性のほうが若干多いといわれる。ドルイドは、4つのエレメントと方角、すなわち、東-空気、南-火、西-水、北-大地を神的な存在とみなし、太陽・樹木・水など自然を崇めるのが特徴である。儀式時には白いローブを着用し、杖をもっている者が多い。ケルト暦の8つの季節の祭りを祝う際には、ストーンヘンジやエイブベリーなど、古代のケルト文化の遺跡の傍でおこなうことを好む。ドルイドの儀式には、ドルイドでなくても参加できるものが

多い。

ドルイドの実践には世界各地の伝統文化の混淆が見られる。というのも、ドルイドは、自分たちを「失われたケルト文化の復興者」だとみなしていて、ブリテン島の「先住民」ケルト人の文化復興の手がかりは、今も残っている世界各地の「伝統文化」にあると考えているからである。とりわけ、北米のネイティヴ・アメリカン、オーストラリアのアボリジニ、チベット仏教文化への関心が高い。日本文化についても同様に、侍の生き方や武士道を評価している。とりわけ神道は同じ自然崇拝をするアニミズムとして共感をもっている。

伝説では、グラストンベリーにやってきた初期のキリスト教徒と、もともと暮らしていたドルイドは仲が良く、キリスト教徒はドルイドから影響を受けたし、ドルイド神官の中にもキリスト教の司祭になった者がいると言われている。また、グラストンベリーにはかつて、ドルイドの学校があり、その跡地にグラストンベリー修道院が建てられたという伝説も存在している。このような伝説を背景に、当地ではドルイドの活動が活発である。

たとえば、夏至と冬至の時期に、世界最大のドルイド団体『バード・オーベイド・ドルイド団』(Order of Bards, Ovates, and Druids (OBOD))の集まりが開かれている。夏至にはトール、冬至には聖杯の泉(Chalice Well)で儀式をおこない、両日の夜にはタウン・ホールでパーティとコンサートが開かれる。儀式には120-150人ほどが、パーティには300人ほどが集まる。あるメンバーは、「普段はなかなか会うことのできないドルイドの友達と会うよい機会」だと話す。

ドルイドの多くは全国的なOBODのような組織に属して、各地のドルイドと交流を図る一方で、地元のドルイド団体にも属していて、共同で小規模な儀式をおこなったりもしている。

グラストンベリーを拠点にするドルイド団体は三つある。代表者同士の関係は良く、多くのドルイドは複数の団体に同時に所属している。メンバーは皆がグラストンベリー在住というわけではなく、近隣市町村に暮らしている者も多い。主な活動内容は、季節の祭りを祝う儀式であり、3団体が共同で開催されることが頻繁に見られる。また、ドルイド仲間の結婚式があると、食べ物や飲み物を手土産に駆けつける。このような儀式は、広く一般に宣伝することはしないが、ドルイドでなくても参加は歓迎される。

4-2 ドルイドになる

ここでは、筆者自身のドルイドへのイニシエーションの儀式について記述してみよう。

ことの始まりは、2006年9月13日に、ドルイドのケリーからかかってきた電話だった。彼はグラストンベリーのドルイド団体の一つ『暁のドルイド団(仮名)』の代表者である。「今週の土曜日は暇? この日の2時に白の泉(White Spring)で儀式をやるからおいでよ」と言われる。「白の泉」とは、グラストンベリー・トールのふもとから湧き出る泉のことで、カルシウムが豊富なため、白い色をしている。イニシエーションが何とかと言っていたが、よく聞き取れない。とりあえず、参加したいと伝えた。ケリーは「カメラを忘れないように。僕のグループの儀式だから、好きなだけ、写真を撮っていいから。研究に必要なんだろ」と言ってくれた。そこで、9月16日、午後1時半頃に白の泉にいった。

白の泉の周辺には15人ぐらいが集まっていた。彼らはおしゃべりをしたり、太鼓の音に

合わせて、踊ったりしていた。ドルイドのローブを着ている人もいるが、普段着のままの人も多い。

2時頃、ドルイドの杖を手にしたケリーがやってくる。ジーンズの上に白いローブを着ている。腰には黒い革のベルトを巻き、首からはいくつものペンダントをぶら下げている。そして、白いローブと革製のベルトを取り出すと、それらを筆者に見せながら、「今日はエリコがドルイドに叙階（ordain）される日なんだ」と言う。自分が今から、ドルイドになる?! きょんとんとしている筆者の顔を見て、「こないだ、電話で言っただろう。あとでエリコのイニシエーションをするんだ」と説明される。このとき、3日前の電話の話をようやく理解する。今日は、自分のドルイドへのイニシエーションもおこなわれるのだ。

グラストンベリーの別のドルイド団の代表者、デボラとその娘や孫娘も来ていた。デボラもケリーと同じく、白いローブを着ている。白い毛糸の帽子をかぶり、動物の角製の杯を首から下げ、ケルト十字のペンダントをつけている。

筆者の友達のビリーとサラ夫妻がやってきた。ビリーは黒いローブに黒い帽子。青いマントの後ろには五芒星形が金色で刺繍されている。サラは薄青のシャツとロングスカートの上に、黒いマントを羽織っている。腰には赤い布を巻き、黒いベルトをしている。左胸の辺りに緑色の丸いワッペンをつけている。このワッペンは、彼女とビリー、そしてケリーが属しているアイルランドにある大規模なドルイド団体のリーダーからもらったものである。

「ねえ、サラ、今日は何があるの?」と聞いてみる。サラは「私も詳しくは知らないの。電話でケリーに呼び出されただけ」と答える。そこにいた数人にも聞いてみたが、みんな何があるのか、詳しくは知らない様子だった。

予定時刻をだいぶ過ぎた3時頃、デボラが道の真ん中に進み出てくる。「今日、『暁のドルイド団』を改め、『アヴァロンのドルイド団（仮名）』になります」と話を始める。「みんな、このすぐ裏にある（トールのおもとの）フィールドにいきましょうか」と言う。「誰でも参加できるから、いきましょう。一緒にドルイド教の哲学の主権を生み出すのを手伝ってください。ドルイド教とは、ペイガニズムであり、哲学で生き方です。あらゆる宗教に由来しています。だから、誰でも参加を歓迎します」とつけ加える。「さあ、いきましょう!」と言うと、歓声が上がり、筆者たちはフィールドへ登っていった。

フィールドでは、52人の参加者（女性25人、男性27人）が、中心を向いて一つの輪を作った。儀式の始まりとともに、筆者はビデオカメラを回し始める。



写真4 東の主を呼ぶ

輪の中心に出てきた女性カレンは、参加者と相談しながら、大体の東西南北の方向を決めていく。そして初めに、東の方向を向く。みんなもその方向に体を向ける。カレンは、黒い皮の鞘におさめられた剣を両手で握って、頭の上に掲げながら、「東を呼ぶ。東に平和はあるか?」と尋ねる（写真4）。「東に平和はある」

と全員で復唱して応える。一度剣を下げて、南のほうを向く。再び剣を掲げながら、「南を呼ぶ。南に平和はあるか？」と尋ねる。「南に平和はある」と全員で応える。同じように西、北にも平和を呼ぶ。「それがずっと続きますように (So mought it be)」「それがずっと続きますように」と全員で復唱。カレンは剣を下ろす。しばらくの沈黙ののち「これで、四方向に平和があるということだ」と宣言する。それから、再び剣を頭の上にかざして、上に平和を、地面に剣を突き刺して、下に平和を呼んだ。

カレンが輪の中に戻ると、参加者全員で東を向き、両手を挙げる。サークルを開くのだ。東の方角にいる人が、東の主を呼ぶ。「東の主、空気のスピリット、…万歳、そしてようこそ。」全員で復唱する「万歳、そしてようこそ。」南、西、北の主も次々と呼び出される。

再びデボラが中央に現れ、今日の集まりの目的を話す。この儀式は、『暁のドルイド団』の人数が増えすぎて統制が取れなくなったため、『アヴァロンのドルイド団』という新しいグループを再編するためにおこなわれたものだという。新しいグループへの所属を希望する人は、中央に集まるようにと言われ、3分の2ほどの人々が中央で輪を作った。それ以外の人々はその周りに輪を作り、二重の輪ができた。外の人数のほうが少なかったため、筆者も含めた中の人々は、おしくらまんじゅうのようにぎゅうぎゅうづめになり、外の人たちは、めいいっぱい腕を伸ばして、隣の人と手をつないだ。

一度、輪がほどけたあと、中の輪を作っていた一部の人々が中央に集まって、それ以外の人々で彼らを囲んだ。全員で「アー、エー、オー」と低い声を伸ばす。「もう一度」とデボラに促され、「アー、エー、オー」と繰り返す。もう一度、繰り返す。「アー、エー、オー」。

手を離すと、杯に入ったミードが回ってくる。ミードとは蜂蜜酒とも呼ばれる、蜂蜜を発酵させたアルコール飲料である。きらきらと輝く金色で、蜂蜜を凝縮させたようなおいがする。一口、口に含むと、口の中に甘いような苦いような、つんとした味が残る。ドルイドの儀式で頻繁に飲まれる酒である。杯が一巡する間に野原に座ってギターを弾き始める人が出てくる。それに合わせて、歌や踊りが始まる。みるみるうちに、自由に音楽の輪やおしゃべりの輪が広がっていく。

20分ほどしてサークルを閉じることになり、初めのように輪になる。ケリーはどんぐりの小枝を入れたかごを下げている。「せっかく各ドルイドグループの代表がいるのだから」と言って、輪の中にいた一人の女性のところにいく。「ここに三つのどんぐりがある。それぞれ、新しい協定、新しい名誉、新しい正義を意味している。本物だ。君のグループを代表して、とっておいてくれ」と言って、どんぐりを手渡す。それから、それぞれのネオペイガニズムのグループの代表者に三つずつどんぐりが渡される。代表者に配り終わると、全員にどんぐりが一つずつ配られる。筆者も一つもらう。

どんぐりをもらって、周りの人たちと喜んでた筆者は、ケリーの声で我に返る。「もうすぐ日本に帰るエリコのドルイドへのイニシエーションをします」と中央に呼び出されたのだ。彼に促されるままに、サラに付き添ってもらって中央に進み出る。ケリーの前でひざまずく。彼は剣を筆者の左肩に載せる。「ドルイドとして、常に真実を述べることを誓いますか？」ときかれる。「はい」と言う。続いてケリーは右肩に剣を載せ、もう一度

同じ質問を繰り返す。「ドルイドとして、常に真実を述べることを誓いますか？」同じように「はい」と答える。最後に頭に載せると、再度尋ねられる。「ドルイドとして、常に真実を述べることを誓いますか？」同様に一言「はい」と答える。

そのあと、デボラの孫娘に差し出された白いローブと革のベルトを身につける。ケリーは、ある人に写真撮影を頼んでくれた。ケリーやデボラ、ビリーやサラとも一緒に撮って



写真5 ドルイドになった筆者を囲む友人夫妻

もらう(写真5)。筆者は、輪の中をぐるりと一周して、みんなに「ありがとう！」と大きく手を振る。みんな手を振り返してくれる。元の場所に戻ると、誰かがミードの入った杯をもってきてくれる。「君がイニシエーションしたお祝いなんだから、一人で全部飲んでいいよ」と言われ、飲み干す。甘苦い味が心地よくのどを落ちていく。そのあと、いろいろな人に「おめでとう！」とか、「やあ、シスター！」とか「家族になったね！」などと呼ばけられた。

ケリーがこちらにやってくる。「どうだい、ドルイドになった気分は?」「最高だよ!ありがとう」と返す。「でも、君は今、ドルイド見習い(Druid to Order)であり、1年後、またはつぎに会った機会に、1ランク上げて、正式なドルイド(Druid of Order)になるんだよ」と言い、「だから、絶対にまたグラストンベリーにやってこなくちゃだめなんだよ」と続ける。筆者のドルイドとしての日々は、まだ始まったばかりらしい。

5 おわりに

自分がいかにグラストンベリーという町で楽しくフィールドワークをやっていたかを伝えるためだけに、この二つのエピソードを取り上げたわけではない。一般的に女神運動やドルイド教の実践者は、積極的にさまざまな文化を取り入れる。彼らはふつう欧米の白人であり、取り入れる文化は非欧米のネイティブ文化である。それらは悪く言えば、実践者が意識しているかどうかは別として、従来の欧米中心主義(植民地主義)を克服してはいないと解釈することも可能である。つまり、これらの活動の中には、プラットが想定していたコンタクト・ゾーンの特性が見られる。さらに、グラストンベリーにおける女神運動やドルイド教の実践の場合、今を生きる人々が、過去の人々が創り出した伝説を取り出して、自分たちの実践に利用しており、空間的だけでなく時間的にも、広い意味でのコンタクト・ゾーンの特性が見られるのである。

最後に、筆者の調査自体が、新しいコンタクト・ゾーンの可能性を秘めていることも指摘したい。プラットが想定した「コンタクト・ゾーン」は、ヨーロッパ人がヨーロッパ以外の地域に出かけていき、そこで出会った「現地人」との関係を考える空間としての役割に留まっている。それに対して、本稿の舞台となっているグラストンベリーという空間では、ヨーロッパ以外の地域からやってきた調査者(筆者)が、大英帝国の子孫である人々

を観察しているという、プラットの想定していたコンタクト・ゾーンとは逆の関係が見られ、それがさしたる障害もなく、すんなりと受け入れられているのである。女神運動の儀式でもドルイド教の儀式でも、筆者は儀式に参加しつつ、ときには一步下がって、イギリス人を観察していたわけだが、どちらの事例でも、突然中央に呼び出されて、その場の主役となり、参加者全員の注目を集めてしまったのである。つまり、調査者と被調査者の関係は、筆者がイギリス人を観察するという一方向なものではなく、互いが互いを観察する可能性を常にもっているという意味で相互交渉的であったと言える。調査対象であったはずのイギリス人は、田中〔2007：41〕が指摘した「省察的な他者」だったと言える。

初めに紹介したインフォーマントの言葉に戻ると、筆者がイギリスで文化人類学の調査をおこなうということは、植民地時代の初期の文化人類学の調査において見られた、ヨーロッパと非ヨーロッパ世界の人々の関係をひっくり返す試みであった。しかし、そこで非ヨーロッパ世界の筆者が、調査者として絶対的な権力をもつことはなかった。筆者も調査中、イギリス人の観察の対象となる可能性があり、筆者とインフォーマントの関係は、常に相互交渉的だったと言える。つまり、筆者がイギリスでフィールドワークをおこなうという実践そのものが、従来のコンタクト・ゾーンの権力関係を攪乱させるものであり、文化人類学の現代的実践だと言えるのである。

注

- 1) ヨーロッパ最大の野外ロック・コンサート。「グラストンベリー」の名がついているが、実際にはグラストンベリーから10キロメートルほど離れた村ピルトンの農場で開催されている。現在では、音楽だけでなく、多様な現代パフォーミング・アートの祭典として知られている。
- 2) 英国の六大宗教であるキリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンドゥー教、シーク教、仏教以外の信条のこと。
- 3) レイラインとは、たとえば古代の遺跡、古い泉と丘の頂上など、二つ以上の聖地を結んだ直線であり、その直線上は地球のエネルギーが非常に強いと言われている。
- 4) ケルト神話では、西方に魔法の島アヴァロンがあり、そこでは死者が復活のときを待っているとされる。アヴァロンは現実に見える世界ではなく、現実的な世界と重なり合った神秘的な世界である。冬季に現れる湖の中に浮かんでいるように見えるトールが、アヴァロン島のイメージをさらに駆り立てた。
- 5) ペイガニズム (Paganism) とは、キリスト教がやってくる以前の、ヨーロッパの古い信仰の総称である。そのような信仰をもっていた人はペイガン (Pagan) と呼ばれた。現在、このような信仰はネオペイガニズムと呼ばれ、実践者もネオペイガンと呼ばれる。
- 6) “Temple” の定訳は「寺院」であるが、本建物を訪れたことのある複数の日本人が「寺院」というより「神殿」のほうが、雰囲気似つかわしいと述べ、筆者もそれに賛同する立場であるため、あえて「神殿」という訳を用いる。
- 7) ケルトの暦では、季節を8つに分けて、それぞれの節目の日が祝祭日とされていた。Samhain (10月31日頃) に始まり、Yule (12月21日頃、冬至)、Imbolc (2月1日頃)、Eostre (3月21日頃、春分)、Beltane (5月1日頃)、Litha (6月21日頃、夏至)、Lammas (8月1日頃)、Mabon (9月21日頃、秋分) で終わる。
- 8) 2007年の春分からは、再び女神神殿で開催している。

参考文献

小松加代子 2007 「女神信仰」田中雅一・川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』世界思想社, pp.

166-182。

田中雅一 2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」『Contact Zone』1:31-43。

Bowman, Marion 1993 Drawn to Glastonbury. In Ian Reader and Tony Walter eds., *Pilgrimage in Popular Culture*. London The Macmillan Press, pp. 29-62.

—— 2004 Procession and Possession in Glastonbury: Continuity, Change and the Manipulation of Tradition. *Folklore* 115:273-285.

—— 2005 Ancient Avalon, New Jerusalem, Heart Chakra of Planet Earth: The Local and the Global in Glastonbury. *Numen* 52:157-190.

Fortune, Dion 2001 (1986) *Glastonbury Avalon of the Heart*. London: Society of Inner Light Trading.

Hexham, Irving 1971 *New Age Thought in Glastonbury*. MA Thesis submitted to University of Bristol.

Jones, Kathy 2000 *In the Nature of Avalon*. Glastonbury: Ariadne Publications.

—— 2001 *The Ancient British Goddess*. Glastonbury: Ariadne Publications.

—— 2006 *Priestess of Avalon Priestess of the Goddess*. Glastonbury: Ariadne Publications.

Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writings and Transculturation*. London: Routledge.

Prince, Ruth and David Riches 2000 *The New Age in Glastonbury: The Construction of Religious Movements*. New York: Berghan Books.

Roberts, Anthony ed. 1978 *Glastonbury: Ancient Avalon, New Jerusalem*. London: Rider and Company.

Sage, Vanessa 2005/2006 Sitting with Your Own Tree: Pilgrims and Pilgrimages in Glastonbury. *International Journal of the Humanities* 3 (7):43-48.

インターネット資料

Somerset Interactive Area Profiles Towns Census 2001 homepage <http://www.somerset.gov.uk/somerset/statics> 2006年1月27日閲覧。

引用 CD

“Song for Banbha” in *Singing the wheel of Brigitana* by Vocal Ana.

附録

1. バンバの勧請の原文

Hail and Welcome Bambha,

Great Mother of the Earth, Gaia,

We call you...Welcome...Come join us here today in your sacred space.

We walk upon your sacred body and feel you cooling beneath our feet and the Summer draws to a close.

We give thanks for your abundance of fruits, berries and nuts...the second cut of harvest.

You feed and nurture us, care for us and keep us grounded upon your beautiful body.

The earth now brown, the trees and sheeding their leaves of golden and amber leaves...you are preparing to sleep.

Great lady we call to your creatures of the deep, the badger, the fox and the mole...come from your deep burrows and homes to join us.

Morgan, sister to this land of Avalon, Moronoe, come sister, keeper of the mysteries of the earth

and magic.
Teach us Mother to care for you as you care for us.
Come Nalava of the West...come join us, be here with us now.
Hail and welcome Bambha.

2. バンバの歌 (作詞作曲 Sally Pullinger)

Banbha, Banbha in September, Mellow sun and autumn rain
Ripen fruit while we remember this year's joy and pain
You are the Goddess of the harvest, Mother of Earth, abundant One
For all the fruits that you've provided, we give thanks for every one

Mother Earth, Gaia, Banbha, Moronoe
Mother Earth, show us your way
Mother Earth, Mother of ten thousands names
Mother Earth, help us all change

Fruit and grain and nut and leaf, we gather, stash and store
And wood to feed her fire and keep our families dry and warm
Deep inside the Earth is turning, fox and badger dig your hole
Store in plenty for the winter, shelter from the coming cold

Mother Earth, Gaia, Banbha, Moronoe
Mother Earth, show us your way
Mother Earth, Mother of ten thousands names
Mother Earth, help us all change

Standing on your Earth, Great Mother, stillness in my soul
I pray for peace on earth, great Mother, Banbha, heal us all
You are provider and protectress, fox and badger by your side
Through you our dreams are manifested, brought to earth from deep inside

Mother Earth, Gaia, Banbha, Moronoe
Mother Earth, show us your way
Mother Earth, Mother of ten thousands names
Mother Earth, help us all change